インバウンドと触れ合える、もてなしの心を広げたい

島根県内には3カ所（出雲、隠岐、石見）空港があり、空路の利便性は増しています。しかし、1973年に基本計画路線に決まった新幹線整備は進まず、東西約230キロある県内を結ぶ高速道路も未整備区間があり、陸路で訪れるには時間のかかる地域です。

近年、首都圏や都市部を訪れたことがある外国人旅行者が、地方に足を延ばす傾向にあるといわれています。日本各地に伝わる伝統や文化、自国にはない自然環境などに興味を持ち、来訪していると考えられます。交通の便が良くなくても、見たいものや体現したいことがあれば旅行者は訪れるといえ、今後は「どんな人たちに来てほしいか」を明確にし、情報を発信することがインバウンド対策で重要になると考えます。

島根県内のトピックとして、5月に松江市内で日本三大船神事「ホーランエンヤ」が開催されました。10年に一度開かれる祭りは、370年の歴史を誇り、100隻を超える船団が市内中心部を流れる大橋川に連なる光景は、豪華絢爛で圧巻です。この船を出すのは同市郊外にある五つの地区で、過疎、高齢化が進む中、船上での舞いや漕ぎ手の多くが地区住民で構成され、練習を積み船に乗り込みます。今年は国内外から38万5千人が訪れ、外国人客の姿も多く見られました。

5月に発表された「日本遺産」に、島根県西部地区に伝わる「石見神楽」が認定されました。テンポの速いお囃子と豪華な衣装、多彩な演目とダイナミックな舞は見る人を魅了します。地元には、130を超える神楽団体が活動し、団員の高齢化などの課題もありますが、外国人向けに上演する場合、あらすじを外国語で説明することに加え、台本を英訳し英語で口上を演じる取り組みも始まりました。

観光客に来てもらうためには、住む人が地域の魅力を認識し財産に磨きをかけていくと同時に、来訪者にわかりやすく伝え、触れ合えるメニューをつくるなど、もてなしの心を広げる努力が最も重要だと感じています。

山陰中央新報社ビジネスプロデュース局マネージャー・高橋賢一

ホーランエンヤの櫂伝馬船

石見神楽を鑑賞するツアー者